HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「〈対話の場〉としてのまち歩き観光 : 「長崎さるく」10年間を探る
Author(s)	金, 明柱
Citation	次世代人文社会研究, 14, 239-259
Issue Date	2018-04-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71231
Type	article
File Information	14-13.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈対話の場〉としてのまち歩き観光

―「長崎さるく」10年間を探る―

金明柱*

〈目次〉

1. はじめに
2. 先行研究の検討と本稿の研究視点
3. 長崎さるくの概要
4. 生活者が生成するローカルな対話
5. 長崎さるくの二分化とガイドと参加者の関係性の変化
6. おわりに

要旨

本稿では、日本のまち歩き観光において先駆的かつ最大な事例である「長崎さるく」の10年間の変化を事例に、まち歩き観光の途中で見られるガイドと参加者、参加者同士のやりとりに着目しながら、従来の観光における二項対立的なホストとゲストの関係性を超え、両者の対話を通じてまち歩き観光の場が生み出されていることを実証的に考察した。長崎さるくの10年間においては、住民の生活の営みが見えていた初期のまち歩き観光から、次第に新しい観光名所を中心とした観光客向けの商品として変化している。一方で、まち歩き観光の楽しみ方を共有した長崎市民の参加による常連が形成されてもいる。常連の参加者はガイドや他の参加者と対話的な関係性を持ちながら、主体的に参加し、長崎さるくはホストとゲスト双方において、他者との出会いと相互作用を楽しむ場としても機能していることが分かった。そのなかでホストとゲストは信頼関係を構築し、共にまち歩き観光の場を作り上げる共同的な関係性に発展していた。そういった両者の主体的で対話的な関係性の構築は、長崎さるくの持続性にも繋がっているといえる。

キーワード：まち歩き観光、長崎さるく、ホストとゲスト、対話、住民

* 北海道大学大学院 国際広報メディア･観光学院 博士後期課程

1. はじめに

本研究では、2006年に開催した長崎市のまち歩き観光「長崎さるく博'06」が地域内外で好評を博して以降、日本各地でまち歩き観光が注目を集めているなかで、長崎さるく[1)]の10年間の変化を探ることから、まち歩き観光が住民のホストとゲスト双方としての参加と対話によって支えられていることを論じる。

近年、日本全国において観光は地域振興策として脚光を浴びている。従来は必ずしも観光資源として捉えてこなかった郷土の歴史や生活文化などの価値を地域住民が再発見し、その価値を観光客に発信するといった住民参画の観光まちづくりが盛んになっている。その方法としてとくに注目されているのが、住民がガイドになり、地域の日常的な生活空間を案内する、いわゆる「まち歩き観光」である。まち歩き観光の特徴は、第一に、既存の観光名所巡りではなく、商店街や下町、路地裏など、住民が日常生活を送る場所が観光の対象になる点であり、第二に、その場所を住民が生活者の目線で案内をする点である。まち歩き観光が全国の自治体や住民に注目されるきっかけになったのは、2006年に長崎市で開催した「日本ではじめてのまち歩き博覧会 長崎さるく博'06（以下長崎さるく博'06)」が延べ1千万の集客を達し、地域内外で好評を得られたことによる。その後10年の間、日本の全国各地においてまち歩き観光が仕掛けられている。

ここで注目すべきことは、長崎さるくにおいては、長崎市民のゲストとしての参加が顕著に見られる点である。したがって、本稿では、観光地の住民と観光地に訪れる人々といったこれまで観光人類学において用いられてきたホストとゲストの概念をより広くとらえ、まち歩き観光を企画･実施する側(行政やガイド)と参加する側(参加者)という意味で用いながら、長崎さるくにおけるホストとゲストの相互作用に注目したい。しかし、これまでまち歩き観光を取り上げた研究においては、住民参画の観光まちづくり、または着地型観光の事例として、その仕組みや運営方法が主に研究されており(尾家･金井 2008; 茶谷 2008; 西村 2009; 深見 2009)、まち歩き観光の場を作るホストとゲストの相互作用といった人々の関係性については十分に検討されてこなかった。

---

1) 2006年に都市博覧会の形式で開催された「長崎さるく博'06」は、その翌年から「長崎さるく」という名称で日常的な観光インフラとして定着し、現在まで運行されている。

このような問題意識から、本稿では、日本のまち歩き観光において先駆的かつ最大な事例である「長崎さるく」の10年間の変化を事例に、まち歩き観光の途中で見られるガイドと参加者、参加者同士のやりとりに着目しながら、従来の観光における二項対立的なホストとゲストの関係性を超え、両者の対話を通じてまち歩き観光の場が支えられていることを実証的に考察する。そのことを通じて、住民のまち歩き観光に対するホストとゲストとしての主体的な参加のあり方を明らかにする。

2. 先行研究の検討と本稿の研究視点

本章では、先行研究を検討し、従来の観光研究における問題点を整理したうえで、本稿の研究視点を提示する。また、フィールドワークを中心に本稿作成にあたり行った調査方法を説明し、本稿の構成を提示する。

2.1 まち歩き観光に関する先行研究

日本各地において地域観光開発に対する期待から高まっている現在、まち歩き観光に取り組んでいる地域も増えている[2)]。そういった社会的な要請もあり、まち歩き観光を新たな観光形態として捉え、その特徴や仕組みを分析する研究が蓄積されつつある(松村・丸市 2010; 久保田・吉澤 2014; 吉岡ら 2015; 越智 2016)。松村嘉久らは、まち歩きとは「歩くという身体的行為を伴い、まちそのものをテキストとして読み解き楽しむ、知的で本来は個人的に都市空間を消費する行為」であると定義している。したがって、まち歩き観光の成功は対象となるまちそれ自体の魅力によって左右されるため、誰に何をどう見せるかというコースの選定とインタープリターの力量が最も重要であると論じている(松村・丸市 2010:97)。久保田美穂子らは、「長崎さるく博'06」以降のガイドツアーに対する新たな視点と意味に着目し、まち歩きツアーについて「ガイドを介して、そのまちにちなんだモノの見方や感じ方が伝わり、それへの共感、共鳴を通して、来訪客と地域の人(モノ)との「つながり」を生み出す行為(体験)」であると定義している(久保田・吉澤 2014:84)。既存の研究成果で指摘されてきたまち歩き観光の特徴は大きく二つである。一つ目は、

2) 産経新聞の記事によると、約300以上の地域でまち歩き観光を取り組んでいるという(「知る・学ぶ・交流の楽しさ―いま「まち歩き」が人気」『産経新聞』(2015.3.20))。

従来の観光名所ではなく、住民の日常生活の営みが見られるまち(まちの人)が観光の対象になっていることである。二つ目は、共感やつながりの生成といった感情的な経験がまち歩き観光の魅力として作用していることである。それでは、地域の生活空間を歩きながら生じる共感やつながりの経験は、誰によって、どのようなプロセスのなかで生まれているのだろうか。

深見聡は、「長崎さるく博'06」の集客効果に影響を受けて仕掛けられた他地域のまち歩き観光が期待された成果を得られなかった原因を分析しながら、まち歩き観光では住民のホストとゲスト双方としての参加が必要であり、ガイドの育成やコース作りだけでなく、地元住民が参加者として訪れる仕掛けを作ることが重要であると論じている(深見 2009:62)。住民のガイドとしての役割の重要性が主に論じられてきた先行研究において、住民の参加者としての関わりの重要性を指摘したことは示唆的である。しかし、住民がまち歩き観光のゲストとしてどのような役割を果たしているのか、ガイドや他の参加者とどのようなやりとりを行っているのかなど、まち歩き観光の場におけるホストとゲストのコミュニケーションの状況については従来の研究でいまだ十分に論じられていない。

2.2 ホスト＆ゲスト論

まち歩き観光において、同一地域内の住民間で形成されるホストとゲストの関係性とは、これまで論じられてきた観光における「ホスト＆ゲスト論」からどのように位置づけることができるのだろうか。観光研究においてホスト(観光地の住民)とゲスト(観光客)という枠組みを最初に提示したのは、1977年に出版された*Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*の著者V. Smithである。Smithは観光をホストとゲストの相互作用としてみており、ホスト社会は観光客の訪問により、経済的･文化的影響を受ける側として捉えていた(Smith 1989、三村監訳 1991:8-15)。しかし観光が一般化し、多様化していくなかで、ホストとゲストの関係性はさらに複雑になっており、二項対立的なホスト＆ゲスト論に対する批判も相次いだ。

K. Sherlockは観光によるホスト社会への影響に関する研究の大半は、観光客と地域住民の間の社会･文化･経済･政治など諸社会文化的背景の格差が大きい国際観光に焦点を当てていたため、「ホスト」と「ゲスト」というカテゴリを明確に分類することが容易であったと指摘する。さらにこのような伝統的な二分法は、帝国主義の一形態としての観光が開発途上国のホスト社会に及ぼす影響に着目した研究のなかで継続していたと論じている(Sherlock 2001:273-274)。

そしてホスト＆ゲスト論に対する批判は、ホストとゲストにおける相関的まなざし(Urry & Larsen 2011、加太訳 2014)や、文化の客体化(太田 1993)など、ホスト側の主体性に着目した議論にも受け継がれてきた。近年はホストとゲスト両者の関係性の揺らぎや反転についても論じられている(山崎 2016; 渡部 2017)。しかし、そこでは「見る／見られる」「サービスする／受ける」といった従来の非対称的な役割分担は維持されているまま、ホストからゲストへ、ゲストからホストへとその立場の揺らぎと反転のみが論じられている。観光の場における非対称的なホストとゲストの関係性そのものを乗り越えることは可能であろうか。

須藤廣は理想形ではあるが、ホストとゲストの水平的な関係性の可能性を言及している。「観光客が観光地の〈他者性〉そのものと、それを受容することによる〈自己変容〉を楽しむように、観光客を受け入れる観光地住民もまた観光客の〈他者性〉とそれによる〈自己変容〉を楽しむ」といった互酬的な関係性が観光のなかで生じうると言う。互酬性が成立するためには、ホストとゲストが権力性から離れた人格的に開かれた対等な関係性を持つべきであり、観光が商品化されていないことが重要であると論じている(須藤 2008:49-52)。以上のような議論を踏まえながら、本稿では長崎さるくの途中で生成されるホストとゲスト、ゲスト間の対話が、他者性と自己変容を楽しむ場の形成に重要な要件であるという仮説を持ち、長崎さるくにおける対話のあり方を検討していく。

2.3 調査方法

本研究の対象である「長崎さるく」について説明し、調査対象者の選定過程について述べる。その前に、まち歩き観光の歴史について簡略に説明する。まず、日本における観光ボランティアガイドへの取り組みの最初は、「横浜シティガイド協会」とみなされている(今井・捧 2007:131)。その前身となる「横浜洋館探偵団」(1988年に結成)は、洋館の保存活動の一環として周辺の住民や行政に対する理解を求めることから、観光客に対する案内まで拡大されたケースである(嶋田 1999:299-310)。そして1999年から大分県別府市で始まった別府八湯竹瓦倶楽部の「路地裏散歩」は、衰退していく温泉地の路地裏や歓楽街に光を当てたガイドツアーで、「長崎さるく博'06」の見本にもなり、まち歩き観光の草分け的な存在として知られている。この二つの事例は、地域住民自らがまちの価値を認識し、まちの資源をそのまま活かそうとした点が共通している。そういった地域住民による下からの活動の流れの上に長崎さるくを位置づけることができる。

ここで長崎さるくを研究対象に選定した理由は、第一に、住民が地域の大型イベントを企画･実行し、また多くの住民が参加者として参加するなど、地域イベントを通じて地域全体が盛況になった事例だからである。第二に、近年日本全国にまち歩き観光が広がっているが、その歴史は浅く、そのなかで10年という比較的長い歴史を持ちながら、現在まで継続している長崎さるくでは、住民による観光の発展かつ変容の過程がより明確に見られるためである。第三に、長崎は観光を基盤産業とする地域として戦後行政主導で観光を発展させてきた歴史があり、多数の観光名所が存在するものの、地域の生活文化や住民にとって日常的な場所を観光の対象として取り上げ、従来の観光とまち歩き観光の対比や、住民がアクターとして関わる観光の可能性かつ限界が観察できるためである。

現地調査は2015年5月から5回(4日－2週間／回)行い、参加者としてツアーの構成やガイドの語り、他の参加者の反応を観察してきた。2017年8月からは住み込み調査をはじめ、ガイド研修を受けながら参与観察を行っている。また、元市民プロデューサー、現役のガイド、行政側の担当者、商店街の店主などのアクターに対する半構造化･非構造化インタビューを並行して行っている[3)]。これらのインタビューは事前に調査対象者の同意を得ており、インタビュー内容はすべて文字おこしをした。またツアーの参加においては、事前にガイドの同意を得ており、ガイドの語りや参加者との対話の内容を記録した。

本稿の構成は次の通りである。第3章では、「長崎さるく博’06」の経緯および特徴について述べ、現在に至るまでの変化を概観する。第4章では、元市民プロデューサーたちによるツアーや証言を手掛かりに、住民の間での対話によりまち歩き観光が成り立っていたこと、そのなかでホストとゲストの揺らぎが生じていたことについて論じる。第5章では、長崎市民を中心とした常連の形成におけるホストとゲストの対話的な関係性の構築について論じる。第6章では、全体をまとめながら、長崎さるくにおけるホストとゲストの主体性と共同性について論じる。

---

3) 現在の長崎さるくでは、300人以上の住民ガイドが活動している。そのなかで「長崎さるく博’06」の元コーディネートプロデューサーの茶谷幸治氏が著した文献や先行研究をもとに、1次的調査対象者を選定した。その後は現地にてキーパーソンと話し合いながら、研究対象者を新しく紹介してもらうかたちをとった。それは現場で実践している人々の経験や思いを理解するためであった。また調査中に予想外の要素が発見された場合は、現地で直接インタビューを要請するケースもあり、現場での情報に基づいた調査を試みた。

3. 長崎さるくの概要

本章では、研究対象である「長崎さるく」について概観する。2006年にまち歩きをテーマにした大型イベントの「長崎さるく博'06」が仕掛けられた経緯について述べ、イベントの終了後、長崎市の観光インフラとして定着し、10年以上継続していくなかで見られる変化について論じる。

3.1 長崎さるく博'06開催の経緯

2017年10月現在、人口42万1,612人を抱える長崎市は、戦後「戦災都市から観光都市への脱皮」を目指し、行政主導で観光産業の発展に力を入れてきた都市である。その結果、観光は水産業や造船業と並ぶ主要産業の一つとして成長してきた(加藤・外山 1984:254-255)。しかし、1990年代以降の海外旅行熱の高まりによる国内観光客の減少や、福岡市や鹿児島市など、九州の他地域での観光開発の進展により、長崎市への訪問観光客数は漸減傾向が続くようになる(長崎市 2006)。こうした長崎市における観光産業の停滞は、今後の長崎市の観光のあり方を行政が見つめ直す契機となり、長崎市にハード整備事業[4)]が完了する2006年を目処に大型イベントを行う計画が立てられた。そこで長崎市は地域活動に活発に関わっていた市民たちの意見を集めた。

まち歩きが2006年のイベントのテーマとして構想されたのは2003年まで遡る。当時、秘書広報課係長であった田上富久氏(現市長)が観光事業者や学識経験者など、市民の代表者23名を中心に「観光2006アクションプラン策定委員会」を組織し、自らの人脈を活かし、まちづくりや地域活動に積極的に取り組んでいた9名の市民を集め、ワーキングチームを立ち上げたことに端を発する。ワーキングチームは、長崎タウン誌の編集長や大浦青年会の会員、ネットワーク市民会の結成者など、各者市民レベルでの地域活動に積極的であった人々から成っていた。彼らは「市民プロデューサー」として、「長崎さるく博'06」立ち上げの主要メンバーとなった。

田上氏とワーキングチームは具体的な事業の内容を模索していた最中に、別府市で行われていた「夜の路地裏散歩」というツアーを視察し、参加したメンバー間に長崎市での実施を前向きに考える雰囲気が形成され、2006年に開催するイベントは

---

4) 長崎市では2003年から2006年の春にかけて、国や県との協調事業として、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、長崎県美術館、長崎歴史文化博物館、女神大橋及び出島バイパスなどの長崎自動21車道の整備などをはじめとするハード整備事業が実行されていた。

「まち歩き」を基本テーマとするという方向性が決まった(小林 2012:35)。その後に作成された「観光2006アクションプラン最終提言書」で、以下のようにイベントの基本理念が提示された。

① 本来、地域の誇りであるべき多くの財産が、これまで観光客専用の名所･名物として「商品」ととらえられてきた面がある。そのために地元のことを知らない住民が増え、次代に伝えていくべき価値のある財産が地域に埋もれ、あるいは失われてきた。地域を知ることからはじまる「まち活かし」によって、市民が地域の財産を再確認する機会としたい。
② 観光を、単に経済的側面からでなく、まちを活かしひとを活かす手段としてとらえ直す契機としたい。これまでの「観光＝観光関連業者が潤うためのもの」という発想から脱し、「観光＝地域の資源を活かして、地域全体の活性化や暮らしやすさにつなげるもの」へ広げることになり、観光は長崎市民共通のテーマとなる。市民をはじめ企業、大学、NPOなど多様な人が参加するなかで、まちが磨かれ、人が活性化し、「住み良いまち」と「観光客にとって良いまち」とが融合する方向をめざす(茶谷 2008:34-40)。

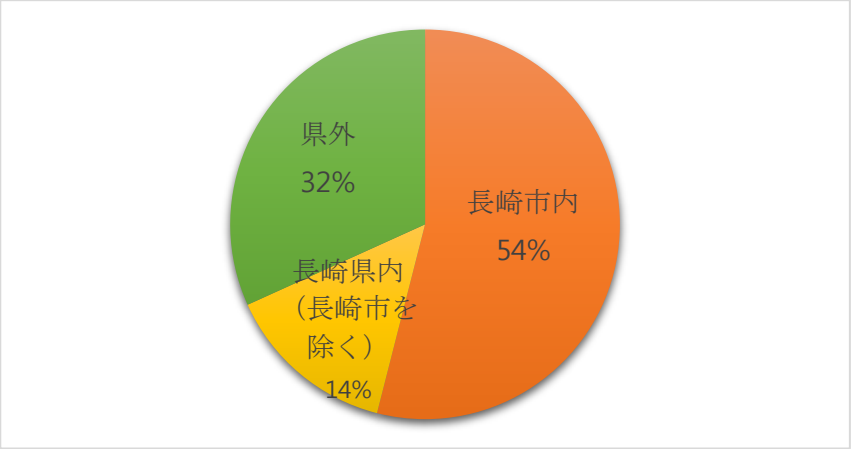
この基本理念から、近年日本各地で盛んになっている観光まちづくりが、観光地として認識されてこなかった地域で新たな観光資源を発掘する、いわゆる「宝探し(地域資源の掘り起こし)」のかたちで行われているのに対し、長崎市の場合は既に広く知られた観光地であるがゆえに、観光客専用の「商品」として捉えられてきたまちの資源を、地元住民のものとして捉え直そうという意識がみられる。また、観光業者のみが利益を得る観光から、地域全体に利益が回る公益的なものへの転換も基本理念として掲げている。そのため、いわゆる観光名所巡りではなく、住民の生活空間であるまちを舞台に、住民が案内をする住民参画の観光開発の手法としてまち歩きが期待されたと考えられる。

2006年4月1日から10月29日まで212日間にわたって行われた「日本ではじめてのまち歩き博覧会 長崎さるく博'06」は、まち歩きコースマップを持って自分で歩く「遊(ゆう)さるく」(42コース)、住民ガイドと一緒に歩く「通(つう)さるく」(31コース)、専門家による講座や体験を行う「学(がく)さるく」(74テーマ)を基礎イベントとし、他にもグラバー園や出島、稲佐山、中島川などの名所を拠点に会場イベントや記念イベントなどが実施された。「通さるく」はガイドと一緒にまちを歩く、いわゆるまち歩きガイドツアーであり、「学さるく」は一時的に行うサブイ

ベントとして、長崎の歴史や文化に対する知識を深めることを目的に大学教授や学芸員、郷土史家(長崎史談会・長崎歴史文化協会の関係者など)による講座や体験が主になっていた。長崎さるく博'06のホスト側においては、95名の市民プロデューサーや395名のさるくガイド・サポーターを含め、伝統工芸や仕事場の一角を店主自身が案内する19か所の「さるく見聞館」、ツアーの途中でトイレ使用や休憩のために立ち寄ることができるホテルやレストラン、喫茶店など118店が「さるく茶屋」として協力し、様々なかたちで市民、地元企業や商店の参加が行われていた。

その結果、長崎さるく博'06のメインイベントであった「通さるく」は、期間中4,479本のコースが実行され、48,748人の参加者数を数えた。平均すると一日に21コース、229人がガイドと一緒に長崎のまちを歩いたことになる。

〈表1〉居住地別にみた予約制イベントへの参加者の割合



出処:長崎さるく博'06記録集より筆者作成

ここで注目すべきことは、予約制イベントの全参加者数の68.3%にあたる33,261人が長崎県民で、さらにそのうちの26,309人(全体の54.0%)が長崎市民であることだ(〈表1〉)。つまり長崎さるく博'06では、県外からの観光客よりも、むしろ地元住民が数多く参加していたのである。すべてのコースを回った人も2,028人にのぼり、長崎さるく博'06においては長崎市民の参加が顕著で、リピーターも非常に多かった(長崎さるく博'06記録集)。このように2006年に開催した長崎さるく博'06は、長崎市民によってイベントが企画・運営されると同時に、多くの長崎市民が参加者でもあるという特徴がみられたイベントであった。

3.2 龍馬さるくと世界遺産さるくの登場

長崎さるく博'06が地域内外で好評であったことにより、翌年から「長崎さるく」という名称で、毎日催行されるようになる。しかし、2006年に52,398人であった参加者数は、2007年は22,937人、2008年は22,620人と激減し、2006年の活気を失っていた。そのなかでNHK大河ドラマ「龍馬伝」の放送が確定し、2009･2010年には坂本龍馬ゆかりの場所や幕末の人物を中心に取り上げた「龍馬さるく」が大々的に仕掛けられる。「龍馬伝」効果により2010年の長崎さるくの参加者数は51,209人にまで回復をするが、そのような集客成果により行政やガイドの間では、長崎さるくにはどのような資源でもコースに取り入れ、商品化につなげることができるという認識が生じる契機となった[5)]。

「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録された2015年からは、グラバー園や大浦天主堂を回る「世界遺産さるく」が打ち出されている[6)]。参加料も一律500円から、コース別に入場料やお土産代を含め1500円～2400円に値上げをした[7)]。ほかにも長崎市の主要観光資源であるくんちやランタンフェスティバル、新世界三大夜景などを題材にした様々な「○○さるく」が新たに創出されている。このように長崎さるくでは、長崎市の様々な観光資源が次々とコースに組み込まれていくなかで、さるくガイドは長崎観光の全般を支えるサポーターとして重要な役割を果たしている。

4. 生活者が生成するローカルな対話

本章では、長崎さるく博'06におけるまち歩きツアーの状況について論じる。そ

---

5) 元市民プロデューサーに対する聞き取りによる(2015年8月20日)。

6) 2015年に「明治日本の産業革命遺産 九州山口と関連地域」が正式に世界遺産に登録されるまでの数年間、8つの構成遺産(小菅修船場跡、第三船渠、ジャイアント･カンチレバークレーン、旧木型場、占勝閣、高島炭坑、端島炭坑、旧グラバー住宅)を保有している長崎市は世界遺産観光地として脚光を浴びている。

7) 2015年に大々的に仕掛けられた世界遺産さるくは次の通りである。「長崎「明治日本の産業革命遺産」」コースはグラバー園入場料(大人610円)込みで1000円、「長崎居留地プレミアムさるく―国宝大浦天主堂とグラバー園をめぐる」は大浦天主堂拝観料(大人600円)とグラバー園入場料込みで1000円、「南山手夕暮れ浪漫散歩―長崎の夕景とグラバー園」(夏限定)はグラバー園入場料込みで800円、「長崎は今日も異国だった」は大浦天主堂拝観料込みで500円であった。2016年4月からは「長崎居留地プレミアムさるく―大浦天主堂とグラバー園をめぐる」「長崎「明治日本の産業革命遺産」」この二つに絞られ、値段も2400円、1500円と引き上げられている。

のため、長崎さるく博'06を立ち上げた元市民プロデューサーによるツアーと、彼らの証言を事例とし、(1) 長崎さるく博'06を企画･実施する過程における住民間の対話内容が、さるくでのガイドの語りを構成する内容になっていたこと、(2) まちを媒介とした対話のなかで、ガイドと参加者の間に共感が生まれていたことについて論じる。

4.1 住民の対話から生まれるガイドの語り

2003年に結成したワーキングチームのメンバーは、市民プロデューサーとして2006年のイベントに向けてコース作りを行う。彼らは2004年から2005年にかけて、住民と一緒にまちを歩きながら昔話や経験談を話し合う場を設け、コースにまとめる作業を行った。元市民プロデューサーたちによると、まち歩きコースを作るため、地元の人々と一緒に歩きながら話し合ったことを通し、自分たちもこれまで知らなかったまちに関する様々な話を聞くことができたという。

> あのおじいさんがあんなとかあのおばさんおもしろかとか知ってるんだよね。そういうのを頭の中に描いたときに、そのときにやっぱり今のさるく、まち歩きになってるとね。頭の中にね。俺たちで、エンターテインメント性としてまちを使ったときに、まちをステージとして使おうと。ほんとさ。ステージとして考えるときに、僕のほうが知ってるわけ！生まれ育ったまちだから。
>
> （元市民プロデューサー桐野耕一氏 62歳 男性、2015年8月20日聞き取り）

桐野氏が証言するように、長崎さるく博'06はまちをステージに住民がその場所で生まれ育ってきた生活者としての経験や思い出を語る場であった。したがって、まち歩きコースのルートやマニュアルはあるものの、ガイドの裁量や状況に応じた案内が薦められていた。たとえば、元市民プロデューサーの平浩介氏(54歳 男性)はツアーの中で「観光客はあんまり来ないところですけれども、私はこの橋とここの雰囲気が大好きです」と言い、ガイド自身が普段好んでいた場所に参加者を案内することも可能であった[8)]。ガイド個人の主観や興味がガイドの語りやルートの構成に強く反映されていたのである。そしてガイドは自分なりの解釈を加えながら、まちに対する新たな見方を提供していた。

---

8)「なごりの寺町散策」、2015年5月23日筆者参加。

大浦天主堂、教会ですね。その前妙行寺というお寺なんですね。その正面大浦諏訪神社という、教会とお寺と神社が一体となった場所なんですね。まさに祈りの三角ゾーン。宗教が混在する場所で、日本ではですね、まあ世界でみると、思想的違いや宗教の違いで争いが多いんですけども、長崎は教会の前だってお寺でも、神社でもよかと。(中略)居留地と長崎のぎりぎりのエリアの中に混在したというのはやはり長崎ならではの場所だということで表現したら大ヒットしました(笑いながら)。
（元市民プロデューサー桐野耕一氏、「長崎は今日も異国だった」2015年5月24日）

長崎さるく博'06のまち歩きツアーにおいて、ガイドの語りは教科書的な知識の学習よりも、そのまちで生活しながら身につけた感覚や普段の思いから生まれていた。しかし、まちに対する何らかの気づきがあり、それをガイドとして参加者に語るためには、まちに対するガイド自身の着眼点や問題意識が必要である。諏訪正樹によると、よい着眼点を得るためには身体の感覚をことばで表現をすることが重要であると言う(諏訪 2016:148)。長崎さるく博'06においては、まち歩きコースを作るために多くの住民が集まり、共に歩きながらまちについて話し合った過程と、作り上げたコースを住民がガイドになって参加者に説明する過程があり、まちに対する思いや感覚などをことばにする過程を繰り返し経ていた。こうした住民間の対話が、ガイドのまちに対する着眼点を磨く契機となり、対話によって得られた新たな知見が次回のツアー時に語られるといった循環が生まれていた。

4.2 ホストとゲストの反転と共感

以上のような形成過程を経たガイドの語りが実践されるツアー中で、ガイドと参加者はどのようなコミュニケーションの実践を行ってきたのであろうか。上述のとおり、長崎さるく博'06においてガイドは生活者の目線でまちを語るという特徴とともに、多くの長崎市民がツアー参加者としてイベントに参加していたという特徴がみられる。そのため、ガイドだけでなく、ツアー参加者がガイドに語るという反転現象が頻繁に見られていたのである。その時の様子を、元市民プロデューサーである桐野氏は次のように述べている。

本当は僕たちが案内をして、お客さまが、僕らが案内をする時にお客さん自身が、人生とか、大げさにいうと日常とかをオーバーラップしてくれることがある。あ、この人が話すことって、俺たちのまちにもあるよね。この人たちの経験って、僕もしたことあるとかね。そういうことってね、ただ身近なまち歩きの中に、結構

現れてくることがあるよね。そういう共有した部分を感じた時にものすごく快感がある。(中略)一方的にガイドが豊富な知識を持って、案内するなんて、それ授業やん。そういうことを実際経験してることはものすごく快感。本当に。感動して泣いたりね。自分の話をしてくれたりね。

(元市民プロデューサー桐野耕一氏、2015年8月20日)

長崎さるく博'06におけるガイドはある情報や知識を参加者に一方的に伝えるのではなく、ガイドと参加者、参加者と参加者のあいだに対話が生まれる雰囲気を作り出すファシリテーター的な役割を果たしていた。そこでガイドの語りは、まちをめぐるローカルな歴史や経験談など、人生の営みに関わる普遍的なものであり、桐野氏の言葉を借りれば、参加者がガイドの語りに自分の人生を「オーバーラップ」させる現象も生じていた。そこで参加者はガイドの語りから喚起され、自分のまちのことや自分自身の経験をガイドや他の参加者に語っていた。そのような対話のなかで、ガイドと参加者間に「案内をする／受ける」という役割は揺らぎ、参加者の語りからガイドや他の参加者が感動するという反転現象が生じたのである。

こうしたガイドと参加者の対話による共感には、大きく二つのタイプがある。一つ目は、自分の語りが他者にとって価値のあるものであるという気づきの経験である。それは、ガイドにとっては日常的なまちが、参加者にとっては珍しい魅力的なものとしてみなされることで、自分たちのまちの魅力や価値を再発見し、まちに対する愛着が増していくという経験である。二つ目は、自分の語りが他者から同意を得て、お互い通じ合ったという喜びの経験である。2006年から活動してきたガイドに対するインタビューのなかで、20-30人ほどの大勢のツアー参加者の前で話をしたときの参加者の大きな反応を懐かしく語るガイドが多かった[9)]。自分の話を大勢の他者に聞いてもらえることや、そのことを実感できるほどに他者からの反応が感じられることは、ガイドにとっては〈他者性〉とそれによる〈自己変容〉を伴う非日常的な経験であったといえる。そのようなガイドと参加者、参加者同士の対話を通じて、従来のホストとゲストの二項対立的な関係性は揺らぎ、対話と共感による互酬的な関係性が構築されていたのである。

ここで重要なのは、長崎さるくの途中で生じているホストとゲストの対話と反転現象は、最終的に両者の役割分担を再確認させる機能もあった点である。つまり、

9) 参加者数が減少した現在は、長崎さるく博'06の時のような大勢の参加者と通じ合う経験は生まれにくい状況にある。そのため、2006年から活動をしてきたガイドたちはその経験を懐かしく考えている。

参加者の語りによってガイド自身が感動し、さるくの場が和むという実感は、ガイドにとっては参加者からの言葉や反応を促す役割の重要性を認識させる契機になる。また参加者もさるくの場に積極的に関わり、ガイドや他の参加者と対話的な関係性を持つコツを身につけていったのである。このようなガイドと参加者の役割分担の再確認は、常連を中心に催行されている「学さるく」でも実践されていく。

5. 長崎さるくの二分化とガイドと参加者の関係性の変化

2006年以降、長崎さるくは長崎県外の観光客向けと長崎市民参加者向けへと二分化していく。本章では、そうした変化が生じるなかでの住民の多様な関わり方について論じる。参加者の違いは、ガイドの役割やツアーの中でのコミュニケーションにも影響を与えており、(1) 県外の観光客のニーズに応じるための「通さるく」において、ガイドと参加者の間では対話が生まれにくく、(2) 長崎市民がホストとゲスト双方の立場で関わる「学さるく」では、両者が協力的な関係性を構築していることを論じる。

5.1 観光商品化する長崎さるく

2006年の長崎さるく博'06のメインイベントであった「通さるく」は、これまで光の当たらなかった観光名所以外の場所やエリア、市井の人びとがまち歩きの素材になり、住民ガイドが生活者の目線で案内をするという方法で注目された。しかし2006年以降は、「龍馬さるく」や「世界遺産さるく」など、ローカルな日常の生活ぶりが見える場所ではなく、ナショナルな歴史的文脈の中で脚光浴びる観光名所が新たに長崎さるくのコースの中に入るようになった。

2007月6月「長崎の教会群及びキリスト教関連遺産」が世界遺産の暫定リストに登録された。それを受けて、同年の11月1日から11月30日までの１ヶ月間「世界遺産登録に向けてさるく！」という合言葉で「2007長崎さるくフェスタ」が実行された。このとき、初めて世界遺産が長崎さるくの題材として取り上げられたのである。2008年からは「NPO軍艦島を世界遺産にする会」の関係者が案内をする「軍艦島さるく」が「学さるく」として実行される。ほかにも「池島炭坑さるく」という体験型のツアーが運行される。2011年には長崎さるくの5周年を迎えてコースのリ

ニューアルが行われ、物産店を巡りながら、試食をする「食さるく」が新設された。2012年には参加者の希望に応じて運行する「オーダーさるく」が創られると同時に、定時運行される「通さるく」は、30コースから14コースへ減少した。2018年4月からはすべての通さるくコースが「オーダーさるく」になる予定である。

こうした長崎国際観光コンベンション協会が中心になったコースの再編は、観光客の誘致と経済的効果を最優先して行われた。とくに2009･2010年の龍馬さるくや2015年以降の世界遺産さるくは、龍馬伝や世界遺産効果によって長崎に訪れる県外からの観光客のニーズに合わせて企画されており、長崎さるくが観光商品として変化していったことを示す。

観光名所中心のコースの再編は、さるくガイドの役割にも影響を及ぼしていた。さるくガイドは世界遺産が位置した地域の住民でなくても、世界遺産について学習を行い、長崎国際観光コンベンション協会が主管するガイド研修で資格を取得することで案内ができるようになった。この点については世界遺産さるくのみに限られることではないが、初期の長崎さるくでは、ガイド個人の経験や思いなど、生活者としての観点を活かした案内であったが、コース再編を境に観光名所に対する豊富な知識や情報を用いた案内が求められるように変化していく。

こうした変化は、ガイドと参加者の関係性の変化にも繋がっていた。通さるくの場合、グラバー園や大浦天主堂など、世界遺産を観光するという具体的な動機･目的を持った県外からの観光客が主に参加している。そのなかでガイドは世界遺産に関する客観的な情報を観光客に伝え、より安全に効率よく世界遺産を回ることを補助する役割を果たしている。例えば、広島から訪れた観光客は「長崎ははじめてだけど、ガイドさんが色んなところに連れていってくれて便利だった」とその感想を述べた[10)]。世界遺産さるくにおいては、ガイドと参加者が共通の関心事を軸とした対話をする関係というよりも、ガイドは効率よく観光地に関する情報を伝え、観光客はその情報を受け入れるといった一方向的な関係性になっている。

さらに、近年は家族旅行や社員旅行などを対象にした「オーダーさるく」が打ち出されている。「オーダーさるく」とは、家族同士や知り合い同士で希望の場所や時間を設定し、それに応じてさるくガイドが案内を行うものである。そのため、「オーダーさるく」でのガイドは、明確な目的や動機を持って長崎を訪れる観光客の満足度を高めるため、彼らのニーズに対応することを最優先とする。また、知り

10)「南山夕暮れ浪漫散歩」、2015年8月21日筆者参加。

合い同士の参加であるため、他者性とそれによる自己変容は生じにくく、参加者間では日常的な会話が行われている[11)]。

5.2 「学さるく」におけるホストとゲストの相互作用

「通さるく」が社会的に注目度の高い観光名所を取り入れながら、大衆観光向けの商品に変化していった一方で、長崎市民の参加により、次第にコースが多様化している「学さるく」の変化も注目に値する。ツアーのルートや説明スポットなど全体的な構成が決まっている通さるくではガイドの裁量が優先されるとは言うものの、ガイドのマニュアル化やマンネリ化が生じやすい。その対策として、コースの内容を含め、参加費や時間、定員など、ガイドがツアーの企画から行う学さるくが活発になっている。2006年当時は、専門家や有名人による案内や体験が行われるサブイベントとして始められたが、その仕組みを活かし、独自のコースを作る名物ガイドが生まれている[12)]。地元名物ガイドである山口広助氏(48歳 男性)は、学さるくにおけるガイドの役割について「きっかけ作り」であると言う。

> このガイドの特徴は、ガイドがガイドをしない。ガイドは何かのきっかけづくりで、山を登りましょうとか。質問が来たら応えるけど、「これは古いです。興味ある人はこれを読んでみて下さい」くらいでいいです。普段行かないところをガイドと一緒に行くことで、何かを聞くためではないと。マイクがあっても聞かないし。ガイド研修をするときも「ガイドはしゃべるな」って、何か覚えなくてもいいし、何でもないことを感動させることが大事だと。みんなで一緒に歩くという雰囲気を好んでいることなのかな。ガイドの前を歩く人もいるし。
>
> (ガイド山口広助氏、2015年9月17日聞き取り)

---

11) 平田オリザは会話と対話の違いについて、会話とは価値観や生活習慣が近い人々の間で行う話であり、対話は類似点が少ない人々がお互いの価値観や情報を交換することであると言う。また、自分とは異なる価値観を持った人と出会うことを通じて、自分自身が変化していくことの楽しめる態度を持つことを対話的精神であると言う(平田 2012:95-103)。

12) さるくガイドの育成は、各コースのマニュアルや関連資料を熟知し、1回の実地研修を受ける方法で行われている。マニュアルには歴史的な場所や人物に関する説明がスポットごとに詳細に書かれており、トイレの位置や写真スポットも記載されている。他にも話し方やビジネスマナーなどの座学も行われる。ガイド資格を獲得した後は、通さるくの場合長崎国際観光コンベンション協会がガイドの日程希望に合わせ割り振りをしている。通さるくの案内をしながら、ガイドとしてのスキルや人気を得たガイドが自らコースを作る学さるくに取り組んでいる傾向がある。したがって、ガイドの個性を前面に出す学さるくにおいては、ガイドの育成は基本的に不可能である。

ガイド山口氏を含め、学さるくに取り組んでいるガイドたちは、大抵月1回の頻度でツアーを行っている。毎回異なるコースを作り、参加者を集めている彼らは、普段の日常生活のなかで一人ではほとんど歩くことのない橋や道路沿い、山までコースを拡大し、多様なテーマに取り組んでいる。また、時間や季節によるまちの変化を常に注目しながら、それをコースに反映している様子も見えてくる。例えば、筆者も参加したツアー[13]で、ガイド山口氏はかつて景色が良かった公園に参加者を案内し、「ここのベンチは人の家を見るためにある」と笑いながら語り、マンションが建設された現在の様子を見せたりする。このように、見過ごしやすいまちの変化も敏感にとらえ、まちの変化の様子もツアーに組み込んでいた。

さらに注目すべきことは、学さるくにおいてまち歩きのやり方を共有する常連が形成されている点である。常連の参加者たちの行動の特徴は、ガイドが案内をする道中で自らの観点から面白いポイントを発見しつつ、まち歩きに関わることである。そのため参加者たちが写真を撮る対象も多様であり、それは写真スポットが概ね決まっている(あるいはガイドが写真スポットとして案内をする)「通さるく」とは異なる行動パタンである。つまり、彼らはガイドからの案内やサポートを一方的に受けるのではなく、自らまち歩きの楽しみ方を身につけ、主体的に関わっているのである。

また、他の参加者と言葉を交わし、協力し合う様子もみられる。例えば、女神大橋の下を見学したツアーでは、最後に使用したヘルメットを参加者たちが協力しながら集め、ゴールまで持っていたことがあったが、そのような体験を参加者は最も記憶に残る経験として語っていた[14]。つまり、学さるくの参加者は、ツアーのなかで他の参加者と対話しながら、協力し合った経験それ自体も楽しんでいたのである。このような主体的で協力的な常連が形成されるには、参加者の意見をコースに取り入れ、継続的な参加を促しているガイドの実践にもよる。

> 歩きながら話をしていく時に、この前のどこどこの弁当はおいしかったよとかね。それから去年行ったあそこはもう一回行きたいとかね。よく情報が入って。この前はちょっと暑かったからあの時間帯はよくないという、いい意見も悪い意見も言ってくれるから。どんどん直していけるじゃん。そうするとお客さんは自分が言ったことをガイドさんが聞いてくれたんだ。こんなコースも作ってっていった

---

13) 2017年9月24日筆者参加

14) 筆者は2015年9月22日に参加した学さるくの参加者と2017年10月12日に他の学さるくで再会した。彼女は毎月ガイド黒田氏が行うツアーに参加する常連であり、2年前にも一緒に参加したことを話すと、「一緒にヘルメット運んだね。楽しかったね」と当時の記憶を語っていた。

のは、僕が作ってあげたら、あ、私が言ったことが聞いてもらえたと。そうするとお客さんも嬉しいから。だからやっぱりキャッチボールをして、こう決めたコースを、「どうですか?」と言って案内するんじゃなくて、お客さんからここはこうした方がいい、あるいはこんなことがあったら楽しいなというのを上手く混ぜながら、こうやっていてだんだんお団子が出きるみたいにやっていくと多分美味しいお饅頭になる。

（ガイド黒田雄彦氏 72歳 男性、2010年9月22日聞き取り）

学さるくのガイドは、毎月参加する常連の参加者たちをより満足させるため、参加者の意見に耳を傾けながら、新しい企画やツアーの改善に取り組んでいる。また、常連の参加者たちも「〇〇さんのさるく」といった言い方をし、コースの内容やテーマそのものよりも、ガイドの個性や人格に興味を持ちながら参加している。このように学さるくにおいては、ガイドと参加者の間に信頼関係が構築されており、共に観光の場を作り上げる関係性に発展している。

6. おわりに

本稿では日本のまち歩き観光において先駆的な事例である「長崎さるく」の10年間の変化を探りながら、まち歩き観光に関わる住民の多様なあり方について論じてきた。とくに、まち歩き観光の途中で見られるガイドと参加者、参加者同士のやり取りに注目し、2006年の長崎さるく博'06におけるツアーの状況(第4章)から、観光客向けと市民向けへと二分化が進んだ現在の長崎さるくの状況(第5章)を記述してきた。

長崎さるく博'06では、企画段階から多くの住民が集まり、昔話や経験談を話し合う場が設けられ、住民の対話から生まれたローカルな歴史や文化がまち歩きツアーの中で語られていた。ツアー参加者も、県外からの観光客よりも長崎市民が多く参加していたため、長崎のまちといった共通の話題を中心に対話が生まれやすかった。それは、ホストとゲストの社会文化的な差異が明確であった従来の観光とは異なり、地域内で同じ文化を共有している住民のなかでホストとゲストの役割分担が行われていたことによるのである。

しかし、「通さるく」のコースがより多くの観光客を誘致し収益性を高めるため、新しく注目される観光名所を中心に再編されていったなかでは、ガイドと参加者は

「案内する／受ける」といった一方向的な関係性に変わっていった。常に変化するツアー参加者との状況に応じた対話を行っていた初期から、目的や動機が類似していると想定される観光客向けのツアーへと変化は、山本哲士が論じる、「その場所から規制された文脈に応じてなされるホスピタリティ」から「一対多数で、マニュアル化されたサービス」への転換なのである(山本　2010:164-172)。一方で、まち歩きの楽しみ方を共有し、ガイドとの信頼関係を構築している地元住民の参加者によって常連が形成されていた。地元住民が参加する長崎さるくでは、ガイドは一方向的な説明を控えながら、ツアーの中で対話を生み出すファシリテーター的な役割を果たし、参加者とともに楽しめるきっかけをつくる企画者としての役割も果たしていた。参加者はガイドの案内を受動的に受けるのではなく、ガイドやほかの参加者との対話を試みていた。このようなホストとゲストの共同作業による場の創出は、「協同してやりとりをする場を形成する協働性の実践」(佐野　2015:73)ともいえる。それが可能であったのは、客観的かつ学術的価値を持った観光名所から離れ、住民の過去の思い出や現在の生活に繋がるまちが対話の軸になっていたことによると考えられる。このように、地元住民がガイドと参加者双方の立場から参加し、まちを媒介とした対話を行っている「学さるく」では、ホストとゲストという二項対立的な関係性を乗り越え、両者が対話的で協力的な関係性がみられるのである。

最後に、本稿では、常連の参加者が形成されているツアーにおいて、ガイドはまちの変化に注目しながら案内を行い、そこから新たな対話が生まれていたことを指摘したが、まち歩き観光におけるホストとゲストの対話は、時間や季節によるまちの変化や参加者の構成など、その時の状況に高く依存している。いかに偶発的な事象を発見し、対話に繋げるのかはまち歩き観光の持続性にも深く関わっていると考えられる。これら、まち歩き観光における状況依存性や偶然性の役割については、本稿で十分に検討できなかったため、今後の課題としたい。

参考文献

今井成男・捧富雄(2007)『観光概論』JTB総合研究所.
尾家建生・金井萬造(2008)『これでわかる！着地型観光―地域が主役のツーリズム』学芸出版社.
太田好信(1993)「文化の客体化―観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4)、日本文化人類学会、pp.384-410.
越智正樹(2016)「まち歩き観光の弁別性と分析基準」『第31回日本観光研究学会全国大会学術論文集』日本観光研究学会、pp.265-268.

加藤章・外山幹夫(1984)『わが町の歴史・長崎』文一総合出版.
久保田美穂子・吉澤清良(2014)「今日的『まち歩きガイドツアー』に関する考察」『第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集』日本観光研究学会、pp.81-84.
小林英俊編(2012)『平成24年度観光実践講座講義録人を活かしまちを活かす観光の考え方から―見えない価値を見せる「まち歩き」の実践』公益財団法人日本交通公社.
佐野文哉(2015)「創造されるコミュニケーション―手話サークルにおける対面コミュニケーションの分析から」佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳編『世界の手触り―フィールド哲学入門』ナカニシヤ出版、pp.59-74.
嶋田昌子(2002)「まちづくりとしての観光ボランティアガイド活動―横浜シティガイド協会のケースから」日本観光協会『観光地づくりの実践2』丸井工文社、pp.299-310.
須藤廣(2008)『観光化する社会』ナカニシヤ出版.
諏訪正樹(2016)『「こつ」と「スランプ」の研究―身体知の認知科学』講談社.
茶谷幸治(2008)『まち歩きが観光を変える―長崎さるく博プロデューサー・ノート』学芸出版社.
長崎県長崎市国土交通省総合政策局(2006)『国土施策創発調査―長崎市における交流人口拡大策に関する調査報告書(平成17年度版)』.
長崎さるく博'06推進委員会(2007)『日本ではじめてのまち歩き博覧会長崎さるく博'06記録集』.
西村幸夫編(2009)『観光まちづくり―まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社.
平田オリザ(2012)『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書.
深見聡(2009)「大河ドラマ『篤姫』効果と観光形態に関する一考察」『地域環境研究』1、環境教育研究マネジメントセンター、pp.57-64.
松村嘉久・丸市奨平(2010)「外国人向け着地型まち歩きツアーの理論と実践」『第25回日本観光研究学会全国大会学術論文集』日本観光研究学会、pp.97-100.
山崎真之(2016)「揺れ動くホストとゲスト―エコツーリズムと小笠原新島民の生活実践をめぐって」『観光学評論』4(2)、観光学術学会、pp.107-119.
山本哲士(2010)『ホスピタリティ講義―ホスピタリティ・デザインと文化資本経済』文化科学高等研究院出版局.
吉岡走馬・上田優輝・久保静・東岡侑・吉廣勇佑・渡部杏奈・米田誠司(2015)「まち歩きガイドにおける観光価値の創造過程」『愛媛経済論集』34(3)、愛媛大学経済学会、pp.27-57.
渡部瑞希(2017)「「ホストとゲスト」から「観光の場へ集う人びと」へ―カトマンズの観光市場、タメルで宝飾業に従事する小売商人を事例に」『明治学院大学社会学部付属研究所研究所年報』47、明治学院大学社会学部付属研究所、pp.103-113.
Sherlock Kirsty(2001) Revisiting the concept of hosts and guests, *Tourist Studies*, Vol.1 No.3, pp.271-295.
Smith Valene L(ed.)(1989) *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Philadelphia: University of Pennsylvania(＝三村浩史監訳(1991)『観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論からみる地域文化の対応』勁草書房).
Urry John & Larsen Jonas(2011) *The Tourist Gaze 3.0*, London: Sage Publications(＝加太宏邦訳(2014)『観光のまなざし〔増補改訂版〕』法政大学出版局).
「知る・学ぶ・交流の楽しさ―いま「まち歩き」が人気」『産経新聞』(2015.3.20).

▣ 論文投稿日: 2017年 10月 30日
審査完了日: 2017年 12月 13日
掲載決定日: 2017年 12月 28日

Abstract

Town Walking Tours as Spaces of Interaction:
A case study on the decade of Nagasaki Saruku

Kim, Myeong-Ju

This paper aims to empirically clarify the process which locals create the spaces of interaction in town walking tour, focusing on dialogue between hosts and guests, through a case study of a decade in Nagasaki Saruku. Nagasaki Saruku is known for being a pioneer and the most prominent example in town walking tours. The locals have witnessed many changes in the system, relationships, and experiences over 10 years. This paper discusses whether dialogue is occurring between hosts and guests and how that situation develops, through the perspective of reciprocity and dialogue to promote enjoyable encounters with others and self-transformation within hosts and guests.

However, as time passed, Nagasaki Saruku systemized their tourist operations and emphasis was put on the economic effects. As a result, there was a misalignment of dialogue between the hosts and guests. On the other hand, some locals have participated in Nagasaki Saruku repeatedly, and they are sharing how to involve in town walking tour. The guide plays the role of a planner who creates a chance to simultaneously walk and exchange words with local people while involving hosts and guests. It shows that Nagasaki Saruku is to be built up though the subjective involvement of hosts and guests and the dialogue born at that time gives meaning to the characteristics of Nagasaki Saruku. The spontaneous participation of local people would be the driving force in this development.

Keywords: Town Walking Tour, Nagasaki Saruku, Hosts and Guests, Interaction, Local People